

高遠城跡と高遠のコヒガンザクラ樹林

－天下第一の桜と史跡の共存－

大澤 佳寿子（伊那市教育委員会生涯学習課）

1. さくらのまち、高遠

信州伊那谷の北部に位置する長野県伊那市高遠町は、古くから伊那谷における政治、経済、文化の中心地として栄えた町である。高遠城を中心に東西、南北へ向かう街道が走り、山間ながらもかつては多くの人や物資の往来で賑わった。近代以降、地域の産業構造や交通事情が変わり、現在は過疎化の一途を辿る静かな城下町であるが、毎年4月を迎えると、その姿は一変する。高遠城跡に咲く「天下第一の桜」を目当てに、全国各地から多くの観光客が訪れ、地域が一気に活気づくのである。

高遠城跡に生育するサクラは「タカトオコヒガンザクラ」という固有種で、やや小ぶりで赤みが濃い花が特徴である。同一種のみ約1,500本が城跡一帯に生育し、樹林を形成しているため、満開の頃は目に入る景色一面がピンクの花で覆われる。その様子は言葉に表せないほど美しく、壮観である（図1）。

このサクラを見るために、毎年多くの観光客が高遠城跡を訪れるのだが、開花から散り終わりまでの約2週間で、15.5万人余り¹⁾の観光客が訪れ、その数は年間来場者数の約65%を占める。人口約5,700人の高遠町地域にとって、「観桜期」は年に1度のビッグイベントとなっている。

昭和50年代以降、年を追うごとに大きな集客効果をもたらすようになっていった高遠城跡のサクラは、地域の代名詞となり、観光産業ばかりでなく、町づくりにも大きな影響を与えてきた。もちろん、サクラの足下である高遠城跡にも、様々な形で大き



図1 4月の高遠城跡（上空から）

な影響を与えており、課題も多い。本稿では、廃城から現在のサクラの名所になるまでの高遠城跡のあゆみと、現状、課題について紹介したい。

2. 高遠城の歴史

(1) 高遠城の概要

高遠城は、天竜川水系最大の支流である三峰川と、藤澤川の合流点に形成された河岸段丘上に位置する平山城である。

築城年代は明らかでないが、南北朝の頃から在地領主の高遠氏が拠点にしていたと伝えられ、戦国時代、甲斐の武田晴信（信玄）が信濃へ侵攻した際に、高遠氏の居城を接收し、大規模な改修を行ったとされている。武田氏の南信濃における拠点となった高遠城には、諏訪（武田）勝頼や仁科盛信など、信玄の近親者が城主として配置されたが、武田家滅亡の過程では、壮絶な戦いが行われた末に落城している。一般的に高遠城は、この時期の城としてのイメージ

が強く、昭和48年（1973）に国の史跡に指定された際も、指定理由の説明に「三峰川と藤沢川の合流点にある段丘先端部に築かれた平山城できわめて戦国的な城郭の構えをとどめている。」とある。しかしながら、現存する遺構の大部分は近世城郭としての遺構であり、戦国末期の落城で壊滅的な状態になった城を、江戸時代初期までに大改修した結果が、現在の高遠城の姿であるといわれている。

江戸時代の高遠城は、高遠藩（石高3万3千石）の政庁となり、明治5年（1872）の廃城まで約270年間、保科氏、鳥居氏、内藤氏という三家の大名が入れ替わりで城主に就いた。特に、元禄4年（1691）から明治維新まで、最も治世が長かった内藤氏については、古文書や記録、絵図など多岐にわたる資料が残されているため、これらの資料を通して、当時城内にあった施設（御殿や役所の建物、門、櫓、番所、馬屋、蔵、神社、藩校、庭園など）や、その利用形態を知ることができる。

（2）高遠城の廃城

明治初期、版籍奉還、廃藩置県など、地方をめぐる支配体制がめまぐるしく変化する中、高遠藩は高遠県となり、城内には県の役所が置かれ、県知事の内藤頼直が政務を執っていた。県知事の頼直は旧藩主であり、政務に関与したのも旧藩士らであったため、明治初期の新体制といっても、関係者の役職名が変わっただけにすぎず、城の利用実態は旧藩時代とほとんど変わっていなかった。

明治4年（1871）7月、他県との合併により高遠県が廃止され、役所としての役割を終えた高遠城は、明治5年（1872）2月に筑摩県へ引き渡された。その後は全国的な流れと同様、新政府の方針に基づいて廃城手続きが進められていくこととなる。

高遠城の処分は、現在の家屋の取り壊しと同様、まずは中身の片付け（道具や武具等の処分）、次に建物の取り壊しと樹木の撤去、最後に土地の処分という順序で進められていった。

道具等の処分は、筑摩県へ引き渡される以前に内藤家主導で行われており、武具は旧藩主内藤家から



図2 松島屋が記した高遠城の入札記録
「御城郭下見帳」、「城郭当座帳」、「建具入札帳」
（伊那市立高遠町歴史博物館寄託資料）

の下賜品として、旧領内全域の神社や村役人を務めた家、藩士らに配られたことがわかっている。

続いて建物等の処分を取り仕切ったのは陸軍東京鎮台第二分営で、入札の結果、城下の商人松島屋（下寺徳次郎）が明治5年（1872）9月に665両で建物と樹木を一括で購入した。松島屋は、購入した建物や樹木を物件ごとに細かく分類し、番号をつけ、予定価格を定めた上で、11月にさらなる競売を行った（図2）。

この競売には様々な人が参加しており、門や土蔵などを始め、障子や襖、釘隠しといった建具、礎石、庭石にいたるまで、あらゆるものが予定価格を超える高値で、城下や近郷の富裕層に買い取られた。その後、建物は順次取り払われていき、積雪期や作業人足が集まらない農繁期を見送った後、翌明治6年（1873）7月までに取り壊し、搬出を終えた。樹木の取り払いも同年12月までに終えている²⁾。

こうして更地になった高遠城の土地は、大蔵省の所管となった本丸と笹曲輪、南曲輪を除き、二ノ丸や三ノ丸、法幢院曲輪などが民間へ払い下げられている。

3. 近代における高遠城跡の公園整備

（1）高遠城跡の公園化とサクラの植樹

明治8年（1875）10月、政府が進めていた公園づくりの方針を受け、高遠城跡の公園化が決まった。

当時、筑摩県管内で公園地となった高遠城以外の城跡は、松本城（現：長野県松本市）、高島城（現：長野県諏訪市）、高山城（現：岐阜県高山市）の3か所であった。

この時公園地となった範囲は、大蔵省所管の本丸、笹曲輪、南曲輪、東高遠町所管の勘助曲輪であったが、筑摩県は地元の東高遠町に対し、公園となった区域内を修繕し、永久保存するための計画を立てるよう、指示を出している。明治8年11月には、政府の申し出もあり、松島屋が行う予定であった橋の取り壊しが見合わされるなど、公園利用に向けた整備の動きが加速していった。東高遠町では、花樹や実のなる木などを植え、管理人を置いた上で公園を創業したいと考えていたが、明治9年（1876）4月段階ではまだ植樹に至っていなかった。

明治9年7月、東高遠町は隣の河合村「桜ノ馬場」から、「芝草500駄」を掘り取り、公園に植樹したいという願書を筑摩県へ提出し（図3）、許可を受けている（図4）。「桜ノ馬場」とは高遠城下にあった馬場で、江戸時代には武士が馬の調練等を行っていた場所であるが、その名のとおり馬場の両脇に桜の大木が並ぶ、高遠藩内随一の景勝地であった（図5）。江戸時代中期にはすでに桜の名所となっており、遠

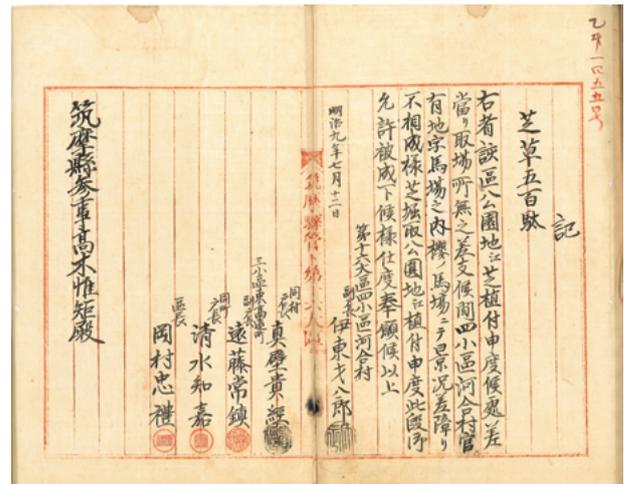


図3 芝草移植の願書（明治9年7月12日付）



図4 芝草移植の許可書（明治9年7月14日付）



図5 江戸時代中期の桜の馬場 『高藩探勝』『桜馬場春駒』（寛保3年）（伊那市立高遠町歴史博物館蔵）

方から旅人たちも訪れるような、まさに現在の高遠城跡のような存在であったが、明治5年の廃城に伴い馬場は閉鎖され、桜の大木も切り倒され、土地は河合村の官有地になっていた。

当地では昔から、「高遠公園のサクラのはじまりは、明治初期に城跡の荒廃を憂いた旧藩士らが、桜の馬場からサクラを移植したものである」といわれており、前掲の資料に見られる「芝草500駄」には、伐採後も現地に残っていたサクラのひこばえが含まれていた可能性が高いと考えられる。「城跡の荒廃を憂いた」ことに加え、新たな公園の景色づくりとして、旧来からの景勝地のサクラが求められ、桜の馬場のサクラが移植されたのであろう。

(2) 公園整備とサクラの名所へのあゆみ

こうして城跡に植えられたサクラは公園地に根付き、新たな景観を作っていた。高遠出身の日本画家池上秀畝は、植樹から15年ほど経過し、大きく成長したサクラの様子を描いている(図6)。

サクラの成長につれ、花見を楽しんだり、樹の下で運動会をしたりと、地域の人々に親しまれる場所になっていった高遠公園であったが、園内には休息所や碑など、様々な施設も建てられた。本丸跡には、廃城以前も城内にあった旧藩主内藤家の祖先を祀る「藤原神社」や、仁科盛信を祀る「新城神社」が再建され、時の太鼓を置くための太鼓櫓も新たに建てられた。明治10年代に建てられたこれらの建物は、

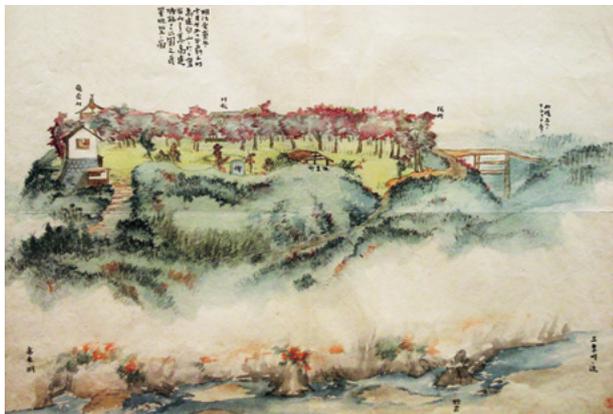


図6 明治23年10月の本丸跡
池上秀畝画「旧高遠城跡なる公園の真景眺望の図」
(信州高遠美術館蔵)

池上秀畝の画にも描かれている。

明治14年(1881)、公園化を記念する「高遠公園碑」が本丸跡に建てられて以降、園内には次々と記念碑が建てられるようになり、日清戦争後の明治30年(1897)には、南曲輪跡に靖国招魂碑も建てられた。大正時代になると、本丸跡を郷土出身の偉人を顕彰する場にしようとする動きが生まれ、大規模な顕彰碑や胸像が建てられたが、それとひきかえに、建設地にあった土塁は削られ、材料運搬の妨げとなった堀は埋め立てられて土橋となった(図7)。

戦前に行われた建物建設や石碑建立のうち、最も大きな事業だったのは、昭和11年(1939)に二ノ丸跡で行われた「高遠閣」の建設である。地元出身の名士らの寄付を元に建設されたこの建物は、200畳の大広間を持つ大規模な和風建築で、花見や宴会の場としても長年利用されてきた。平成14年(2002)には登録有形文化財となり、現在も城跡内のランドマークとして、市民や観光客に親しまれている。

このように高遠公園内には様々な施設が建てられたが、人々に最も親しまれたのはやっぱりサクラで、今に残る明治、大正、昭和初期の公園の様子を写した写真も、満開のサクラの風景ばかりである(図8)。

こうした人々の想いに応えるように、サクラを中心とした公園造りが進められ、公園の拡張に合わせ、サクラも次々と植樹されていった。植樹の時期を大まかにまとめたのが、次頁の表1である。



図7 本丸と南曲輪の間に築造された土橋
(大正時代)

表中の第Ⅱ期は、本丸に隣接する二ノ丸跡の一部（町有地）を公園化したことによるものだが、不明な点が多く、具体的な植樹時期やどこから苗木を持ってきたのかは明らかでない。現状からみて、本丸のサクラと同一種を、近在から持ち込んで植えたものであることは確かだろう。

太平洋戦争中や終戦直後には、食糧増産のための畑にするため、園内のサクラが一部伐採されたこともあったが、戦後復興に合わせて再び植樹された。昭和23年（1948）には、10年ほど前に新たに公園地となり、「新公園」と呼ばれていた法幢院曲輪跡にも植樹が行われた。これらの戦後の植樹が、第Ⅲ期である。当時、町長に依頼されて植樹作業に携わった方の話によると、麦畑だった法幢院曲輪跡にサクラを植えたのは地元の青年会で、十数名で約2時間かけ、40本ほどのサクラを植えたという。町内や隣の美篁村などから、園内のサクラと同じ種類のサクラを苦労して集めたが、日当代わりに当時貴重だっ



図8 花見時期の本丸跡（大正時代）

表1 サクラの主な植樹時期

	時期	要因	主な場所
I	明治9年	公園創設	本丸、笹曲輪 南曲輪
II	明治 ～昭和初期	公園地拡張	二ノ丸
III	昭和20年代	戦後復興	法幢院曲輪 二ノ丸
IV	昭和50～ 60年代	高遠高等学校移転 跡地整備 茶店跡地整備	三ノ丸 二ノ丸

た酒2升をもらい、みんなご機嫌だったそうである。

(3) サクラと城跡の文化財指定

植樹範囲が一気に広がり、戦後植樹された苗木も成木になりつつあった昭和35年（1960）2月、公園のサクラは「高遠のコヒガンザクラ樹林」として、長野県の天然記念物に指定された。明治期からの老木を交え、同一種のみで樹林を形成している点が評価されてのことであったが、指定範囲は二ノ丸跡の一部と法幢院曲輪跡、内堀内であり、最も早く公園地となり、植樹年代が古いはずの本丸跡や笹曲輪跡、南曲輪跡は県天然記念物の指定範囲には含まれていない（図9）。これは当時、町有地のみが指定され、本丸等の国有地が指定を受けなかったためである。その経緯は不明であるが、現在も指定の状況は変わっていない。

そして、サクラの指定から4年後の昭和39年（1964）8月、高遠城跡も本丸跡、笹曲輪跡、南曲輪跡、二ノ丸跡、法幢院曲輪跡、三ノ丸跡の一部が長野県史跡に指定された。さらに9年後の昭和48年（1973）5月には、指定範囲を拡大して国の史跡となった。こうして高遠公園は、国史跡である城跡の上に、長野県天然記念物であるサクラの樹林が生育するという状況になり、同じ場所で2つの文化財が共存していくことになったのである。

4. 高遠城跡の整備計画とサクラ

(1) 史跡高遠城跡保存管理計画の策定

城跡の史跡指定後、高遠町が「史跡高遠城跡保存管理計画」を策定したのは昭和63年（1988）であった。計画では、廃城直前の城郭の姿に復元するという長期整備目標が示され、史跡の構成要素ではない建物等の移転も盛り込まれた³⁾。この計画に基づき、二ノ丸跡内に建ち並んでいた茶店（料理店）や、三ノ丸跡内に残されていた長野県立高遠高等学校の旧校舎などが順次撤去されていき、撤去後の跡地には、時をおかずにサクラが植えられた。これが第Ⅳ期の植樹である。昭和54年（1979）に「高遠町桜憲章」が制定され、城跡内ばかりでなく、町内全域のサクラ

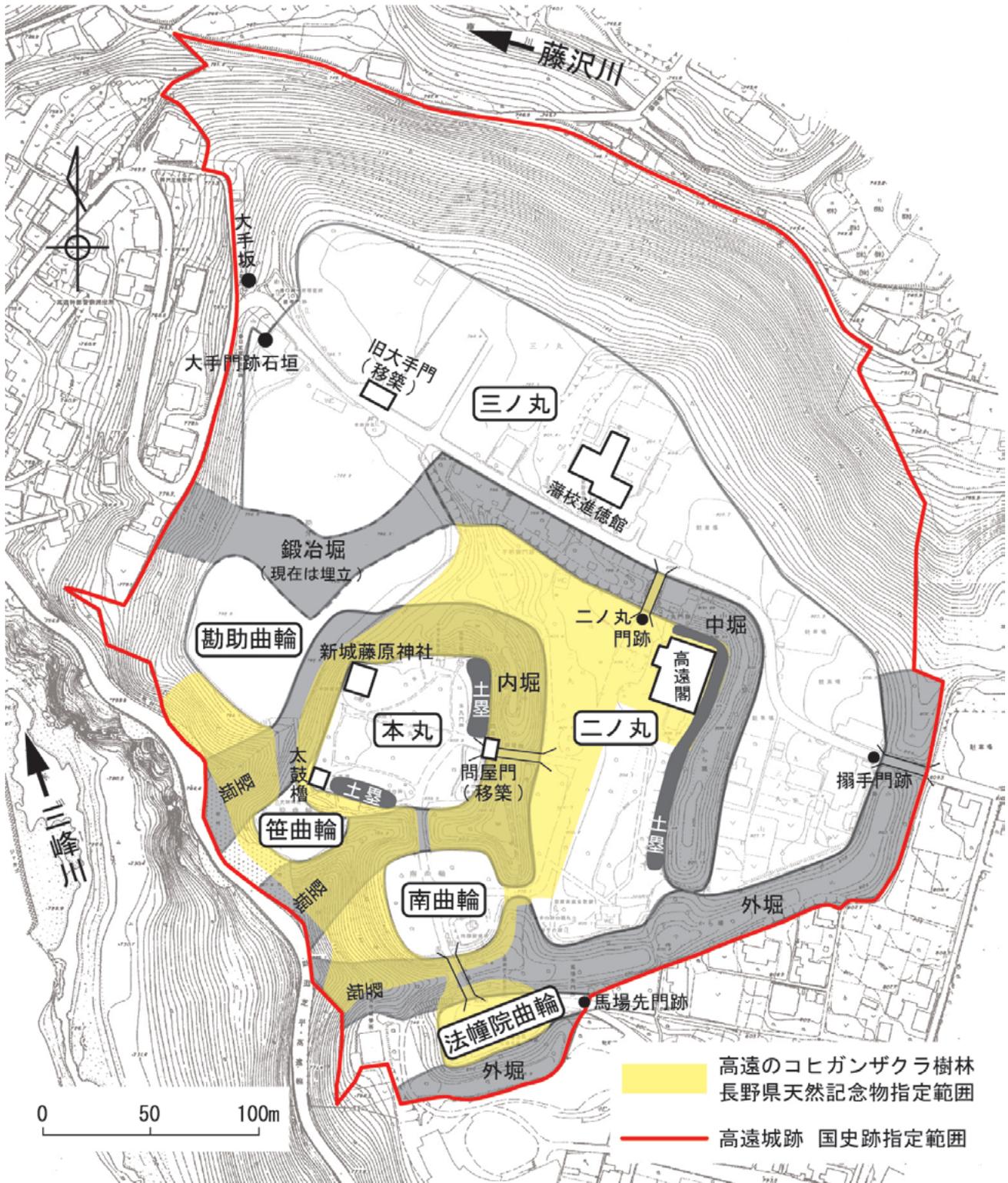


図9 高遠のコヒガンザクラ樹林の指定範囲と高遠城跡の指定範囲および主な遺構

ラも町民全体で保護育成しようとする取組みが進められている中での植樹であった。

実はこの保存管理計画に、サクラの具体的な取扱いは盛り込まれていない。当時、計画策定に携わっ

た文化庁や専門委員の先生方からは、史跡の構成要素ではないサクラは伐採すべきだという厳しい意見が出されたというが、その背景にはこの頃のサクラをめぐる状況があったと思われる。

当時高遠城を訪れる観光客は右肩上がりに増え、20万人を超えるようになっていた。昭和58年(1983)には観桜期の公園有料化も始まり、町にとってサクラは欠くことができない存在となっていた。町内の商店や飲食店が花見客で賑わう一方で、最盛期には町内の道路が大渋滞し、水道の水も不足するなど、完全にキャパシティオーバーの状況も生まれていた。町はこうした状況を打開するため、新たな道路の建設を計画するなど、史跡周辺のインフラ整備を急速に進めていった。サクラの伐採など、現実的には不可能な状況であったが、町の対応があまりにサクラ一辺倒で、史跡破壊が起こりかねない状況が生まれつつあったことから、関係者が強硬な姿勢を見せて町を指導したというのが、その真意であろう。

その後、史跡に関わる計画にサクラの位置付けが明文化されたのは、平成12年(2000)に策定された「史跡高遠城跡整備基本計画」であった。

(2) 史跡高遠城跡整備基本計画とサクラ

整備基本計画には、人々に親しまれた景観を保全するため、史跡と併せてコヒガンザクラの保護育成を行うことが盛り込まれた⁴⁾。遺構整備の最重点地区となった本丸跡では、今後サクラの植樹を行わないとした一方、三ノ丸跡を重点的な景観整備地区に位置付け、遺構に影響を与えないことを条件に、サクラを中心とした植栽を行う計画が示された。史跡全域では、既存のサクラを保護育成することとし、サクラと史跡の共存がうたわれた。この基本方針を元に、現在も城跡の整備が行われている。

5. サクラと史跡をめぐる現状と課題

－サクラの樹勢回復に伴う諸課題－

サクラと史跡をめぐる数ある課題の中で、現在最も大きな課題となっているのが、老木となった樹の樹勢回復の問題である。史跡を保護しながら天然記念物の樹林を守るため、現在行っているのは、既存のサクラを延命するための措置であり、新たな植樹や植え替えは行っていない。延命措置といっても、抜本的な対策は史跡への影響が大きいため、現状で

は、常駐する3名の桜守によるきめ細かな日常管理が最も効果的である。

樹勢回復の問題は昔からの課題であり、明治9年(1876)に植樹されたサクラが80年余りを経過した昭和20年代にも、樹勢の衰えが問題となっていた。昭和28年(1953)から5年間かけて、本丸跡の老木に若返り措置を施しているが、当時行われたのが不定根誘導であった。これは、樹勢が弱まったサクラの幹から出た不定根に、土を張り付け、こも巻きをした上で、年数をかけて根を地中に誘導し、樹勢の回復を図る方法である(図10、11)。この方法は一定度の成果をあげた。

近年、戦後に植樹された第Ⅲ期のサクラを中心に、



図10 若返り措置中の本丸のサクラ(昭和40年代)



図11 若返り措置後、現在の様子

樹勢の衰えが再び問題となっている。腐朽菌等により内部が腐食した樹が増え、激しい降雨や突風、大雪の際に枝や幹が折れることも増えている。太い幹が折れると危険である上、堀や土塁上の樹が根ごと倒れると、遺構破壊にもつながるため、折れる可能性がある幹や枝を早期に発見し、対応をとることが求められるのだが、一見して問題なさそうな個体が突然倒れることもあり、一筋縄ではいかない。

樹勢回復への近道は、硬化した土壌に対する措置であるが、史跡保護の立場から、これを行うことは非常に難しい。サクラの根は地下の浅いところに広がっているため、地面が踏み固められると、水分が地下に浸透しないばかりか、根の呼吸や養分の吸収が妨げられ、樹勢の衰えにつながる。観桜期を終えた園内の土壌は完全に硬化してしまうため、かつては地面を掘ったり耕したりして、固まった土をほぐしていたというが、史跡内全域にサクラが植えられている状況下では、耕す範囲も全域に及ぶため、曲輪内平坦部の浅い遺構は破壊されてしまっている。現在はサクラの根元を柵囲いすることで対応しているが、周囲からは、樹勢回復のために定期的な土壌の入れ替えを望む声も多く聞かれる。

6. おわりに

高遠城跡のサクラは地域にとって誇りであり、人々が寄せる気持ちも強く、非常に大きな存在となっている（図12）。江戸時代の城郭遺構が重要なのは言うまでもないが、廃城直後に旧藩時代の景勝地をルーツとするサクラが植えられたことは、歴史の連続性を考える上でも、見逃すことができない事実である。

サクラと史跡の共存と一言でいっても、実際には相容れない部分もあり、様々な課題を抱える中での共存である。伊那市では平成28年度より、サクラの状況を1本ごとに把握する調査が進められている。今まで個体調査は行われていなかったため、ようやくとって良いのかもしれないが、調査範囲は天然記念物の指定範囲に留まらず、実際にサクラが植



図12 タカトオコヒガンザクラ

わっている城跡全体を対象としている。この調査結果を踏まえ、課題解決に向けた方策が検討される予定であるが、人々の想いが込められた城跡とサクラを100年200年先まで伝えていくため、今の私たちがしっかりと考え、多くの方々と問題意識を共有しながら対応していかなければならないと感じている。

【補註および参考文献】

- 1) 高遠城址公園平成28年度入場者数237,519人
高遠城址公園平成29年度観桜期入場者数155,451人
(伊那市役所観光課発表による)
- 2) 高遠城取り払いに関わる一連の経過を記した資料は、「松島屋資料」として伊那市立高遠町図書館に収蔵されている。
- 3) 高遠町教育委員会 1988『史跡高遠城跡保存管理計画策定報告書』
- 4) 高遠町 2000『史跡高遠城跡整備基本計画書』